R2 地域協働研究（ステージⅠ）

R02-Ⅰ-20「地域の歴史文化遺産を活用した持続可能な住民活動意識の醸成」

課題提案者　紫波歴史研究会
研究代表者　総合政策学部　窪幸治
研究チーム員　佐藤観悦・大沼信忠（紫波歴史研究会）倉原宗孝（総合政策学部）今野公顕（同大学院）

＜要旨＞

歴史文化は時代を超えた地域や社会の貴重な資源（宝）である。その中には国指定重要文化財など著名なものも有れば、地元住民・関係者も十分認識していないような知名度の低い、あるいは隠れた資源もある。本研究は、こうした各種歴史文化の視点から本県紫波町に存在する各資源を発掘・保存・普及していくこと、またそのための住民主体の動きと体制づくりを目指すものである。本研究では、関連する講演会・普及活動、地域外の視点からの意見・アイディア交換等を通して、紫波歴史研究会が中心に始めた活動の広がりと地域内外の関心の高まり、今後に展開していく意識・体制づくりが生まれてきている。

1　研究の概要（背景・目的等）

紫波町内には、縄文時代の西田遺跡、平安時代の比爪館跡、中世戦国期の陣ケ岡陣営跡・高水寺城跡、近世の郡山代官所跡や街道跡、重要文化財平井家邸宅など、わが国の各時代を表象する歴史文化遺産が賦存する県内でも貴重な地域である。ほかにも町内各地域には、関連する歴史文化遺産が多数存在することは、歴史愛好家には知られているが、多くの住民は気づいていないのが現実である。

本研究では、これら地域の歴史文化を、地域住民自らが調査研究し、誇りを持って楽しく学ぶことができる取組にすべく、地域の歴史文化への理解促進と地域の手による持続可能な活用に向けた基礎固めをする。

少子高齢化や過疎化が進む地域住民にとって、自らが取り組む歴史文化遺産を活かした活動は、拠り所となる誇りとして、住民自らによる持続可能な地域づくりにつながるものと考える。ここでは学術性から日常性まで、地域から個人まで、幅広い層を歴史文化という切り口から掘り起こし繋ぎながら、地域の財産とし、そのことで地域の新しい価値と人を育む活動に向かおうとするものである。

2　研究の内容（方法・経過等）

紫波歴史研究会として以前にも取組んできた講演会など普及活動を行った。加えて本研究において、歴史探訪ツアーの企画・実施、HPやスマートフォンによる普及啓発の改善検討を進めた。また地域外の人々（特に若い世代）の視点から当該町の歴史文化やそれを活かしたまちづくりの意見・アイディアをもらい地域内外の関係者で議論する場も持った。

これらの実践的な調査研究活動を通じて、今後に繋がる地域内団体・関係者の連携を生み出しつつある。

3　これまで得られた研究の成果

（1）啓蒙・普及活動

従来から取組んできた歴史文化に関わる学習会をさらに拡充して展開した。特に今年度は「盛岡城跡の石垣 と長岡の石切丁場」等のテーマで専門家を招集した内容など参加者に好評だった。また神社や寺を巡る「歴史探訪ツアー」（11月８日）も実施し参加者に直接地域の歴史文化に触れてもらうと共に、関心・認識を促していった。今回は町東部の寺社を巡ったものである。今後、町内各地区を対象に順次展開し全域に広げていく方向性が見えてきた。

（2）情報通信機器活用による普及展開

SNS等が普及している現代社会において、当該研究活動の普及啓蒙においても重要なツールと定め活用を模索してきた。今回、会のHP情報の検討と共にスマートフォンを活用した取り組みをさらに進めた。またスマホを使いながら実際に紫波の歴史文化に触れてもらう企画も行った（スマホの実演講演会、９月26日、27日）。使い勝手など参加者・関係者からの評価は高い。一方で、これまでの情報・資料の蓄積が豊富なため専門的な情報量を多く掲載している点など、検討・改善すべき指摘もあった。有効なツールで有り今後もさらに改善しながら活用普及していく。

歴史・文化また活動の情報発信としてスマホ講習会などの実践的な取り組みが進んだ（左ポスター）。歴史的な各種テーマでの講演会も好評だった（その一つ「盛岡城跡の石垣と長岡の石切丁場」ポスター、右）。

（3）全国の保存・活用事例の情報収集・現地観察

当該町での活動と共に、歴史文化の保存活用に関する全国的な事例の情報収集・現地観察も行ってきた。資料文献等から全国的な現状・動向を探りつつ、特に国内では西日本での取り組みが有効で有り、そこへの現地観察も進めた。また近年災害が多くなってきているが、こうした災害時での文化財の取り扱われ方にも焦点を向けた。

吉野ヶ里遺跡（佐賀県吉野ヶ里町、写真左）は特別史跡として規模・認知度は異なるが保存・活用方法として多くの示唆がある。山田堰（福岡県朝倉市、写真右）は水との共存を図る産業遺産でもあり、アフガン支援で著名な中村哲氏も現地支援の参考に熱心に観察していたという。

熊本地震の現状を後世にも伝えようと地盤の亀裂が保存展示されている（熊本県阿蘇市、写真左）。日本史的にも重要な史跡として地元住民・関係者の熱意のもと整備されている江田船山古墳（熊本県和水町、写真右）。

（4）地域外の視点（大学生）からの提案と議論

こうした当該研究メンバーの活動と共に、第三者の視点・評価も重要・有効と考える。その上で、今回は地域外の存在として、また若い世代の意見・アイディアを活動に反映する試みも行った。総合政策学部学生約15名に紫波の歴史、研究会の活動を知ってもらい、また現地の各資源に触れてもらい感じた意見、またそれらを活かしたまちづくりの提案を行ってもらい、いずれも今後を触発する興味深い内容だった。さらにそれを踏まえて町内各団体・住民と今後の歴史文化保存活用のあり方、まちづくりの仕掛けなど議論・共有する場面が生まれた。歴史文化への認識・意識を高めると共に、専門性に閉じず多様な分野・世代で見つめることが刺激された。

紫波町メンバーによる県立大でのお話は学生にも興味深かった。同時に学生世代の感想が会の活動の参考にもなった（写真左）。紫波町関係者と共に町にある様々な歴史文化資源に学生も触れていった。知らなかった話を直接見聞きする中で興味と共にそれを活かすまちづくり提案を刺激した（写真下）。

研究会の活動、紫波の歴史・文化などについて一通りの学び体験のあと、学生側から紫波町の歴史・文化を活かした各種提案がされた。会場には多くの町内関係者・住民が参加し、非常に熱心な議論となった。

これまでの活動経験・成果また学生提案や住民・関係者との議論を通じて、今後に向けた活動のテーマが各種生まれた。それらについて、実現可能性、関連する関係者・団体との連携体制、具体的な予算検討など確認・検討される。そのもと今後の具体的な活動が見据えられた。

今後の取り組みとして、スタンプラリー、フォトスポットの創設、ご当地検定など様々なアイディアが提示、想像された。またこれまでの会の活動経験も踏まえて、情報発信の際に受け手に興味を持ってもらえるような表現方法、単発のイベントではなく四季を通じて年間で仕掛ける考え方など、各世代からの検討の中で新しい発想も生まれてきた。

4　今後の具体的な展開

今年度の活動を通じて、歴史文化という内容についての知見、またそれを保存活用していく方向や方法が具体的に見えてきた。特に資源としての歴史文化をまちづくりの諸側面で活かしていこうとする方針が定まってきた。また普及啓発としてスマホなど具体的手段が確立する中で、紫波町役場とデジタル化推進の協定も生まれてきている。

以上のような成果を踏まえ、活動内容と共にそれを推進していく体制も拡充してきている。町役場をはじめ庁内主要団体との連携などである。今後はさらに住民層への細部への普及、協力体制を構築していくことが期待され課題でもある。

これらを踏まえ次年度以降、現在のテーマ・活動のさらなる展開と同時に、今日の社会における現状・課題、すなわち少子高齢化・過疎化、また地方都市の振興のあり方について、長期的展望を持ちながらさらに踏み込んだ活動を展開していく予定である。

5　その他

紫波歴史研究会のホームページ

http://gorounuma.jp/